巻頭インタヴュー

音楽とは、愛なんだ！

指揮者
広上淳一
Hirokami Junichi

聞き手
坂元勇仁
（レコーディング・ディレクター）

圧巻、有志オーケストラとの合同レッスン

坂元：広上先生はご自身の母校である東京音楽大学で指揮のレッスンをされています。その内容について教えていただけますか？

広上：指揮専攻としては個人レッスンがあります。それとは別に、管・弦・打楽器の先生方と有志学生によるオーケストラの協力で、合同レッスンを行っています。僕はこの合同レッスンを受け持っていますが、実は正規の授業ではないんです。ここ５～６年の間に定着してきたものです。

坂元：何回か見学させていただきましたが、とてもおもしろいレッスンでした。正規の授業でないということは、単位にならないのでしょうか？

広上：指揮科の学生は単位になりますが、器楽の学生は完全なボランティアです。では、なぜそこに来てくれるのか？それは、日本を代表する演奏家の先生方が、指揮やオーケストラのアドヴァイザーとして参加してくださるからです。先生方は学生に交じって演奏していますから、そこで弾き方を尋ねればきちんと教えてくれる。僕の中では、器楽の学生もいっしょに指揮の勉強をさせたい、という気持ちもあります。名目上は指揮科の合同レッスンですが、どの専攻の学生にも門戸を開いているので、音楽教育の学生にも鍵盤ハーモ

○ ひろかみ・じゅんいち
東京生まれ。東京音楽大学指揮科に学ぶ。第1回キリル・コンドラシン国際青年指揮者コンクールに優勝し、国際的な活動を開始。1991〜'95年ノールショピング響首席指揮者、'91〜2000年日本フィル正指揮者、'97〜'01年ロイヤル・リヴァプール・フィル首席客演指揮者、'98〜'00年リンブルク響首席指揮者、'06〜'08年米国コロンバス響の音楽監督を歴任する傍らフランス国立管、ベルリン放送響、ウィーン響、コンセルトヘボウ管、モントリオール響、イスラエル・フィル、ロンドン響、サンクトペテルブルク・フィルなどに定期的に客演。またオペラの分野でも、シドニー歌劇場におけるヴェルディ『仮面舞踏会』や『リゴレット』が高く評価されたのをはじめ、国内でも新国立劇場、日生劇場等で数々のプロダクションを成功に導いている。東京音楽大学指揮科教授、京都市芸術大学客員教授として後進の指導にも情熱を注いでいる。現在、京都市交響楽団常任指揮者兼ミュージック・アドヴァイザー。同交響楽団とともに第46回(2014年度)サントリー音楽賞を受賞。

ニカなどで参加してほしいと声をかけています。

坂元：今まではそういう場がなかったのでしょうか？

広上：音楽教育専攻に合奏の授業があったり、器楽専攻にオーケストラ・スタディなどの履修科目はありますが、そもそも、僕が学生の頃には指揮科にはオーケストラを実際に振る機会がほとんどありませんでした。だいたいはピアノ２台での授業。１年間40時間近いレッスンを受けて、年に一度試験のときだけオーケストラの前に立たせてもらうというのが、どの大学でもお決まりのパターンでした。自分たちは実践訓練があまりにも少ない状態で、世の中に放り出されたものですから、学生たちには少しでもそのハンディキャップを埋めてあげたかったのです。ただそれが今では当たり前となってしまい、振らせたいという親心から少し甘やかしてしまったかなという若干の反省もあります。僕らの頃は振りたくて振りたくて「どうしてこんなに勉強しているのに振らせてくれないんだ！」というフラストレーションがエネルギーになっていましたから。

レッスンは学び合いの場

坂元：レッスンを拝見していると、決してテクニックを教えていらっしゃるわけではないですよね。テクニックよりも大事にされていることは何なのでしょうか。

広上：生きていく中でぶつかる問題を、指揮という作業、音楽をつくるという作業を通して考えてみることです。僕自身も彼らと学びたい。一流の音楽家が指揮科の聴講生としてこの場にいらっしゃいますし、「人間学」にも触れられるような場所にしたいと思っています。僕は教えるのではなく、問題点を振りながらともに考えていく。

坂元：問題点は振りますが、ご自身は指揮棒を振りませんね…。

広上：（笑）。

坂元：どうして指揮しないのですか？

広上：形を見せると僕のマネをしてしまうから。物まねがうまい学生は、「先生がこう振ったから」とできてしまうんですよ。一つの形としては完成されますが、その時点でほかの方法を閉ざしてしまう。それによってその学生の創意工夫が停止してしまいます。ですからみんなの前で手本は見せないようにしています。

坂元：指揮科の学生、オケの学生、先生方、そして広上先生も含めて学び合いに近い場ができているということですね。

広上：あれだけの人数のオケになれば、それなりにいい音がしますし、楽しいですよね。でも楽しいだけではなく、そこから音楽を通して、社会哲学や政治学、歴史や古文、現代文、漢字の勉強をしたり、時には性教育にまで脱線したりすることもあります。誰かが難しい言葉を使ったら、必ず「それを漢字で書ける？」とボードに書かせます。自分もそこでもう一度漢字の確認をしたりね。

坂元：とにかく問いかけがとても多いですね。意図的ですか？

広上：意図的です。なぜかというと、自分の中に答えがあるわけではないから。でも学生は「必ず先生が気に入る答えがあるはずだ」と考えるわけです。特に優等生ほどその傾向が強い。だけど僕も分かっていないときがある。だからみんなで考えるために問いかけをするという意識です。

坂元：でもみんなきちんと言葉にして答えるところがすごいですね。

広上：最初は答えられなかったのですが、続けていくうちに彼らも慣れてきました。合同レッスンでは全員が何か振られるぞ、何か答えないといけない、いじられる…と。

坂元：いじりですか？

広上：いじりが大事なんですよ。学生を一人一人いじります。優秀であるかどうかというバロメーターはありません。

かかわりがあって、人は育つ

坂元：先生には、教育学部が、音楽大学の中心にあったほうがいいというお考えがあると伺いました。それは今の趨勢から考えると少し異端な気がします。そのあたりについてお聞かせください。

広上：僕自身がこの大学に入学したとき、音楽教育の学生は優秀でした。人数も多かったし、ピアノも上手だし、歌もできる、学校の勉強もできる。だから授業ノートのコピーはいつも教育の子に頼んでいました。「こんなにまじめな人が教壇に立ったら、おれみたいなのはしかられるんだろうなぁ」なんて思っていました。僕らのように、指揮者やピアニストなどを生業にしている人間は、ある意味、寿司屋の職人と同じです。音楽学校のことをフランスではコンセルヴァトワールと言いますよね。これは「職人をつくる」という精神に基づいていますが、自分が大学で教えるようになり、社会的な評価を受ける年齢になってくると、日本の音楽大学では職人をつくることだけが主流になってはいけないのでは？と思うようになりました。

坂元：というと？

広上：今、音楽教育専攻は窮地に立たされています。音楽教育の学生は「楽器ができなかったから音楽教育なのね」という目で見られることがある。そして学生たち自身もコンプレックスを抱いて入学してくる。これは非常に問題だと思います。僕は、どんなに文明が発達して機械が優秀になったとしても、生の人と人との触れ合いがいちばん大事だと思うんです。心の触れ合い。人と人がかかわり合って、それで成長していく。でも今はこうしてずーっと１日中スマホを見ていたり、ゲームをしたりする人が増えて、人間の時間はどんどん個別化していっている。

坂元：なるほど。

広上：合同レッスンはおせっかいなんですよ。人の個人的な関係や悩みにまで入り込みます。家のことや、彼氏彼女のことも。もちろん、おせっかいをやいても相手の人生を救えないこともあります。

坂元：それは、そうですね。

広上：思春期の子どもたちを扱う中学や高校の先生方は日々難しいことに直面していらっしゃるでしょう。最近の子どもは、面と向かってしゃべったり、相手と触れ合ったりすることが減り、お互いにほめたり傷付けたりすることを怖がるようになっています。ひどい場合、告白して断られることが怖いからと極端な行動に出てしまう。２回３回と振られることを想定したくないんですよね。拒まれることはつらいですよ、否定されるわけですから。僕なんか12回振られましたもん。

坂元：12回！ほんとうですか!?

広上：まじめに「12回はさすがにつらかったでしょう」って言われたこともありますよ。でもそこから再生するエネルギーをつくっていくわけです。今の子どもたちはすぐに「万事休す！」と思ってしまうようですけれど。

音楽って、こんなに楽しいんだ

坂元：音楽を学んだ人が社会に出たときに、どういう心構えでいればよいでしょうか？

広上：年齢、学歴、性差、名声のあるなし…あらゆるdiscrimination（区別、差別）を除いた、フラットな考えをもてるようになれるといいですね。合同レッスンの授業でも、「指揮者としてほめられなくても、人間としてだめじゃないぞ」と言い続けています。

坂元：広上先生のレッスンは、自分が小さかったときに感じた「音楽って、こんなに楽しいんだ」という原点を取り戻せる場であるように思います。

広上：僕自身もそうです。この授業は上手であることを目的としていません。作品を通して、指揮を通して「何かを考えることを学ぶ」場です。最初は「優れた指揮者を育てなければならない！」と思っていましたが、日本を代表するような指揮者は育てようとして育つものではなく、放っておいても

○ さかもと・ゆうじ
レコーディング・ディレクター。1961年、鹿児島市に生まれる。学習院大学大学院人文科学研究科博士前期課程修了。東京現代音楽祭アシスタント・プロデューサー、ピクターエンタテインメント・ディレクター（嘱託）を経て、2005年に会社を設立。主に学芸、クラシックのCD制作に携わるほか、複数の大学で音楽科の学生を対象としたキャリア教育プログラムの講師を務める。現在、ユージンプランニング代表、大阪芸術大学非常勤講師。教育芸術社の作品として『THE CHORUS』シリーズ、『Chorus ONTA』シリーズなどの制作に関わっている。

育ちます。それよりも「やっぱりモーツァルトってすごいね、合奏って楽しいね」と分かち合えることを、合同レッスンではとても大切にしているんです。

坂元：分かります。ディレクターの仕事をしていると、学生から「ディレクターにはどういう力が必要ですか」と聞かれます。ずっと「コミュニケーション能力が大切だ」と答えてきましたが、最近ちょっと違うんじゃないかと思い始めました。コミュニケーションする力ではなくて、コミュニケーションする場をつくる力。これが僕らの仕事じゃないかなと思います。先生の合同レッスンは、まさにその場なのだと感じます。

おれは絶対だめじゃない

坂元：広上先生はどんな子ども時代を過ごされましたか？

広上：やんちゃではあったけれど、まじめでした。子どもの頃は親の期待に応えるべく、無理して勉強もしました。でも５教科の中に好きになれる教科もないし、つまらなくて。父親が転勤族だったので、小学校を３回、中学校も３回転校しました。どんどん友人関係も変わり、この学校では人気者、別の学校ではみんなから口もきいてもらえないぐらいのいじめられっこという経験をしました。でもそのおかげで、どのオケにもほめられる指揮者なんていませんから、そのことで一喜一憂するということはなくなりました。

坂元：ああ、なるほど。

広上：転校を重ねるうち、みるみる成績もガタガタに…。でも逆に小学校のときのまま、中途半端に成績がよかったら音楽の道に進まなかったかもしれないし、どこかほかの大学へ行って音楽の道に戻ってきたかもしれない。指揮の場合はなるべく早く進路を決めたほうがいいのですが、僕は中学３年のときに指揮者になると決めました。でも親には言い出せなくて「音楽の先生になる！」って言って。成績も落ちていたし、親にも選択肢がないし、それで音楽系の高校に行かせてもらったんです。

坂元：転校を繰り返していても、何とかやっていけるという確信があったのですか？

広上：成績がぐちゃぐちゃになっても、どこかで「おれは絶対だめじゃない」「自分は違うんだ」と思っていました。

坂元：それは、すごい。

広上：でも屈辱はいやというほど味わいましたよ！高校に入っても、音楽の勉強を始めたのが遅いので、楽典や聴音ができないんです。かたやずっと音楽教室へ通っていて入学してきた子もいるわけで、彼女たちは満点を取る。隣の女の子には「広上くん、指揮者って人をまとめなきゃいけないし、人に尊敬されなきゃいけないんでしょ？大丈夫？」って言われる。でも「おれはやれる。絶対負けない」と思っていました(笑)。

坂元：根拠はないけれど自信はあったのですね。

広上：そうなんです。今の子どもたちもそうであってほしい。学習指導要領の中での成績は悪くても、例えば本を読んでいるとか、映画をたくさん観ているとか、もっと社会勉強をしていてほしいと思います。アイドルに夢中になることでもいいんです。僕も昔、桜田淳子さんのおっかけでしたから。

入選して賞状をもらった！

坂元：大学に入るときに２浪なさったとか。

広上：そうです。この東京音楽大学という大学がなければ、指揮者・広上淳一は存在しません。大学もまさか指揮者を輩出することになるとは思わずに、当時は僕らを入学させたと思います。

坂元：そんなことはないでしょうけれど。

広上：僕の大学での４年間は、苦しみの多い波瀾万丈の連続でした。ですから学生時代にあまりいい思い出はありませんが、だからこそ、今これだけ大学に愛情を注げるのだと思います。当時の東京音楽大学は発展途上の学校でしたし、ここから指揮者になるのは大変だろうと思いました。

坂元：相当の自己啓蒙をなさったのですね。

広上：それと、自分の中でリミットを決めていました。２浪もしたし、４年で卒業させてもらったし、だめだったらまっとうに働くつもりで教員免許も取りました。最後のチャンスと思って日本の民音指揮コンクール(現・東京国際コンクール〈指揮〉)を受けました。でも、大学４年間でオーケストラの前に立ったのは、たった30分だったんですよ。

坂元：え…!?

広上：必死に勉強していたけれど、オーケストラの感触は分からない。それなのにプロのオケに挑戦するのだから、一次か二次で落ちると思っていました。しかも一次の前日、クラスメイトの女の子に「広上くん、明日コンクールね。がんばってね。でも無理よ絶対」と言われた。「私、４年間あなたのことを見ていたからがんばっているのは分かるけど、この学校から指揮者が出たことはないし、無理だから。そんなに血みどろになって勉強しても落ちたら意味ないし。あなた、先生のほうが向いてるわよ」って。

坂元：……(しばし沈黙)。

広上：そう言われてさすがに「やっぱりだめかな」と思いました。最終的には入選して賞状をもらい、それで勇気が出ました。また指揮の勉強が続けられるなって。つらい４年間の最後に、ぎりぎりのところで一条の光が差し始めて、落としていた単位を取るために、１年生に交じって必死にがんばりました。そうしたらおもしろいことに名古屋フィルハーモニー交響楽団のアシスタント・コンダクターにも受かり、そこから国際コンクールまで、ぐっと道が開けました。もちろん名古屋でも苦難の１年間でしたけれどね。

坂元：うん、うん。

広上：僕が学生に伝えたいのは、「あきらめるな」ということです。そして「そのときだめだと言われても、絶対にくさるな」。ちなみに、さきほどのクラスメイトの女の子の話にはオチがあって。

坂元：何ですか？

広上：民音指揮コンクールで結果が出たあとも、彼女はうんともすんとも言ってこない。その後、卒業して名古屋から帰ってきてコンドラシン(キリル・コンドラシン国際青年指揮者コンクール)で優勝し、とうとうN響デビューの演奏会に彼女が来たんですよ。

坂元：それで!?

広上：その第一声が「アタシ、あなたは必ずやると思ってたのよ～！」。

坂元：(大笑い)。

広上：調子よく「あなたには輝きがあった！」とか言ってね。ほんとうにきれいな女の子だったけど、最低な性格でしたね。だけど、近頃は最低でもないなと思うんです。

坂元：どうしてですか？

広上：ほんとうのこと、本音を言ってくれたから。本気で心配してくれるほど、僕が相当哀れに見えたんでしょうね。

勝負はこれから

坂元：タフであるためにはどうしたらいいんでしょうか？

広上：学生たちに言いたいのは「変なミエは捨てなさい」ということです。つらいことがあっても「なにくそっ」と思ってほしいんですよ。

坂元：そうか！

広上：「ああ私はもうだめだ」じゃなくて「勝負はこれから」と思ってほしい。僕は中学生の頃「今に見てろ」と思っていました。一般的な、世間的な評価から外れていても、だめだと思わないでほしい。同様に学校教育の現場の先生方にも言いたい。成績は公正に出しますよね。でも、才能があるのと素点は違うんだとはっきり言ってあげてほしい。そうでないと生徒は落ち込んでいるかもしれませんからね。やっぱりあきらめないでほしいな。

坂元：そうですね。

広上：「あきらめるな」とは「意地を張れ」ではないんです。方向転換は大いにしてほしい。才能がないのに無理にしがみつく必要はありません。かたくなに「自分はこれ一筋じゃないと生きていけない」とか「これがなければ死んじゃう」という頑固さは命取り。もっと柔軟でいい。それから、自分を好きでいてほしいと思います。

坂元：自己肯定ですね。

広上：ふつうであること、平凡であることが失敗だと思っている若者が多い気がするんですよ。僕も他の人からは成功しているように見えるかもしれないので、あまり説得力はありませんが、ふつうに生きることがすごいんだと気付いてほしいんです。

大切なのは愛なんです

坂元：先生の根底には「人間が好き」という人への愛情を感じます。

広上：基本的にはそうですね。ただ限界はあります。だめとなったら一生だめです。譲れない一線があります。学生にもギリギリまでチャンスは与えますが、合同レッスンでだめになっていく子もいます。破門にして追い出した子もいます。人間愛はありますが、誰もかれも永遠にということはありません。

坂元：それを含めての愛を感じます。破門にするのも、振ってあげるのも愛ですよ。

広上：おっしゃるとおりです。相手にするのは愛なんです！

坂元：広上先生も12回、たくさんの愛をもらったということですね(笑)。

広上：そう言った女の子がいましたよ！「私に振られてよかったでしょ？」って。どれだけ傷付いたと思っているんだ(笑)。

授業者に訊く―1

和歌山大学教育学部附属小学校で学ぶ、５年生と６年生の複式学級の授業を訪ねました。総勢15人のクラスで、落ち着いた学び合いの中にさまざまな気付きが生まれていました。今回は３人の先生方に聞き手となっていただきます。

※この取材は平成27年１月に行われたものです。

授業者：江田 司（和歌山大学教育学部附属小学校）

本時の授業の位置付け

本時は『待ちぼうけ』の鑑賞を行う３時間扱いのうちの第２時です。前時は、詩の朗読を通して言葉のもつリズムや詩の表している内容をつかみ、音楽の特徴を感じ取って聴き歌いする活動を行いました。本時は、歌詞に着目して演奏家の歌唱表現の工夫を感じ取って聴く活動を行います。

詩の朗読や演奏の聴き比べ、楽譜をもとにした楽曲の構造理解、演奏表現の工夫を考えるなど、さまざまな活動を通して、詩の内容と曲想の変化、速度、強弱とのかかわりを感じ取りながら味わって聴く力を身に付けます。

舩越 勝 先生
和歌山大学教育学部
附属小学校校長

授業の流れ

	○学習の内容　・学習活動	●指導上の留意点 ☆評価
導入	○前時の学習内容を確認する。 ・見付けた工夫の部分を確認する。	●前時の児童全員の傍線部分を１枚のワークシートにまとめて提示する。 ●取り上げられていない部分は「工夫していない」と感じさせる工夫がなされたところでもあると伝える。
展開	○演奏を聴いて歌い方の工夫を考える。 ・前時に傍線を引いたワークシートを用い、曲を聴いて、歌い方が工夫されていると思う箇所の歌詞を○で囲む。 ・感じたことや気付いたことを発表する。 ・○を付けた理由を相手に伝わるように自分なりの言葉でワークシートに記入する。	●歌詞が強調され、３～４番のテンポが遅い演奏を聴かせる。 ●傍線を引いた場所を確認する。縦書き歌詞を○で囲むよう促す。 ●○で囲った理由が記入できていないと判断される場合は、「速度」や「強弱」というキーワードを示して考えるように促す。 ☆速度や強弱の変化だけでなく、言葉と旋律のかかわりや曲想とその変化など、楽曲の特徴を感じ取って聴いている。
まとめ	○歌詞の内容を感じ取りながら歌う。 ・これまでに聴いた演奏表現の工夫を思い出しながら、自分なりに工夫して歌う。	●一斉に歌ったり、クラスを半分程度に分けて互いに聴き合ったりしてもよい。

今からどんなことが展開するのか？と考える力

聞き手：木下喜子（宮代町立百間小学校）
古田彩乃（横浜市立西中学校）
和智宏樹（上野原市立上野原西小学校）

複式学級の子どもと学びの特色

木下：授業中、先生が自然と子どもたちに寄り添い、子どもが何かフフッと笑うと、先生もいっしょにフフッと笑うなど、そういうあたたかい雰囲気がとてもすてきだなと思いました。

江田：複式学級の子どもたちというのはおもしろくて、こちらが無理矢理動かそうとしてもテコでも動かないところがあって(笑)。でも、自分たちでさせてみると、それまでおとなしくて何も言わなかったんじゃないかと思うような子どもたちまでが、ほんの少しずつボソボソッと話しだします。いわゆる「アクティブ・ラーニング」ですよね。協働的な学習だと思います。

○えだ・つかさ
和歌山大学教育学部附属小学校教諭
※平成27年４月より名古屋学院大学スポーツ健康学部准教授

古田：初めて複式学級を拝見しましたが、学年の違う子どもたちが学ぶ中で、一度学習したことのある子どもと初めての子どもがいてどうなるのだろうと思っていました。既習の子どもたちにとっては思い出す機会であると同時に、新しいことを学ぶ機会でもあり、初めて学ぶ子どもたちにとっては、一つ上の学び方に触れる機会にもなっているのですね。

江田：そうですね。

古田：学年ごとに分かれつつ、合わせつつというところもおもしろいなと思いました。年間の授業の中で、６年生の内容を５年生で習ったり、５年生の内容を６年生でも習ったりするといった計画の立て方はどのようにしていらっしゃるのですか？

江田：１・２年生、３・４年生、５・６年生という学年の分け方になっていますので、２年間で教材そのものはほぼすべて学習するようにしています。教科書のどの曲を教えて、どの曲を教えていないのかについては記録していますが、僕も忘れてしまいますので、まず５年生が６年生になったときに５・６年の教科書でどの曲を学習したかを聞き、それを一覧にします。とにかく６年生が卒業するまでに５・６年の教科書の中で未習の曲を取り上げて題材を組む…。つまり５・６年生が別々の活動を同時進行することは極めて少ないのです。一つの教材を５・６年生がいっしょに学習していきます。

既習教材で新たな切り口を工夫する

木下：今回の『待ちぼうけ』のように２回取り上げることもあるのですね。

江田：はい。例えば合奏の教材では、５年生のときは、どちらかというと６年生が演奏したい楽器を取って、５年生は技術的にもまだ不十分だから…と分けていたのを、６年生になったら逆にして扱ったり。本来ならば複式学級では５年生と６年生が別のことをするのが基本です。転校などの可能性もありますから、そのときに対応できるようにということですね。音楽の場合だとなかなかそうはいかないのですけれど。

木下：なるほど。

江田：今日は新しい教材を扱ってみようかとも思いましたが、お客様がいらっしゃると子どもたちも緊張しますので、既習曲で新しいことに挑戦するチャンスだと思いました。子どもたちも「去年やったよー」と言っていましたが、今回は一度扱った曲の切り口を変えてみました。『待ちぼうけ』のバリトンの独唱だと「これもう聴いたのに…」となるので、ア カペラの合唱を選びました。これも実は昨年聴かせていたようで、６年生には「聴いたよ」って言われてしまいましたね。

古田：印象深かったのですね。

江田：そう、彼らの記憶に残っているのもすごいことなんですよ。ほとんどいつも覚えていないのですから、特に男子が(笑)。詩の朗読についても、６年生は何度も聴いていているけれど５年生は初めてです。だから５年生はほんとうにびっくりしている。そのとき６年生はまんざらでもないという顔をしているんですね。「既習」と「未習」と言いますが、こちらが思う以上に子どもの覚えている、いないには差があります。やはり自分で体得した授業というのは

○ふるた・あやの
横浜市立西中学校教諭

よく覚えているようで、一方的に教え込んだものはあまり覚えていないようです（笑）。

無意識に聴かせない

和智：先生のなにげない一言が、子どもたちの聴き方をガラッと変えるきっかけになった場面が何度もあり、たいへん興味深かったです。最初に『待ちぼうけ』を聴かせるときの方法もおもしろいなと思いました。ワンフレーズだけ再生してCDを止め、相談させてから全曲を聴かせていらっしゃいましたね。

江田：この方法をとるのは、曲の中に入ってしまうと無意識に聴いてしまうからです。意識している状態で「今からどんなことが展開するのだろう」と考える、そういう力を身に付けてほしいものですから。『おどる こねこ』などは、最初のワンフレーズを必ず歌わせます。覚えるまで歌ってから全体を通して聴くとフレーズが再び現れたときに気付くので、１回聴くだけで曲の構成が分かります。

和智：そのあと「聴いてどうだった？」と発問して手を挙げさせるのではなく、隣の子どもとペアで相談させ、さらに

○きのした・よしこ
宮代町立百間小学校教諭

先生がそこに加わって会話されていました。そうすることで子どもたちはかしこまらずに話せるし、先生がそれを取り上げてくれる。しかも江田先生はその内容を大きめの声でつぶやくので、それをほかの子どもも聞いているのかな…と。話し合いや交流のさせ方がとてもおもしろいなと感じました。

江田：さすが、よく見てくださっていて…！大きな声でつぶやくのはまさにそのとおりです。ああいうことがあるんだな、こういうふうに言えばいいんだなと子どもは聞き耳を立てていますからね。そのほかに、話し合い中にホワイトボードを用意しておいて、子どもたちに、自分の意見や思ったこと、感じたことをボードに書きに行きなさいと言うこともあります。

和智：一斉に書きに行かせるのですか？

江田：そうするときもあります。その場合は下に名前を書かせて後でナンバリングしていきます。それでも興味のもてない子がいますから「１番から15番の中で同じことを書いているのはどれとどれか見付けてごらん」と言ってぐっと集中させることもあります。ペアで話し合わせたうえで、僕が間に入って話す場合と、ペアで話し合わせて「じゃあ書きに行ってごらん」という場合とを使い分けています。

木下：どこでその見極めをなさっているのでしょうか？

江田：その後の扱いによって変えています。今日は予想どおりデスクワーク中心になってしまいました。どんどん音楽から離れていたので、「１回歌ってごらん」と言ったのです。その瞬間に、子どもの顔色が変わりましたよね。あのままデスクワークでよい場合もありますが、今日はこのまま放っておくと音楽の学習から離れてしまうなと判断しました。

それは何のためか？と考えることの大切さ

古田：今日は手を挙げる場面がありませんでしたね。

江田：手を挙げて意見を言わせるときもあります。そうするとエースが登場します。今日のクラスにも何人かエースがいますが、エースが発言をしたときに僕の顔色が何も変わらないと、そのとたん、絶対みんな発言しなくなる。だけど、「今日は難しい問題だから、隣の子と話してごらん」と言えばそれぞれつぶやき始めます。「何もなかったら“なかった”ということを共有しなさい」と言います。それだけで、次に向けて心が開かれるのです。

和智：先生は「まとまり」や「時間」など、キーワードになるようなことを板書なさっていました。授業の中でキーワードとなる部分をきちんと板書したり、子どもたちに質問したりすることでポイントを「おさえていく」スタイルなのでしょうか？

江田：常に考えているのは、「この授業は、この活動は、いったい何のためか？」ということです。子どもは事実をいっぱい見付けますね。「待ちぼうけ」が何回繰り返されているとか。でも「それは何のためか？」と聞かれたら分からないのです。『待ちぼうけ』には２分音符がたくさん出てくるけれど、それはなぜなのか？いろいろな理由が考えられますが、これを８分音符に変えてみると非常に奇妙なんですよね。「♪待ちぼうけっ　待ちぼうけっ（フレーズの最後が短く切られた感じ）」では。

全員：（うなずく）

江田：それから、メロディーのいちばん最後の音が「♪ころり転げた木の根っこ（最後の「こ」が主音のド）」で終わるのと、木の根っ「こ」がミで終わる場合とでは雰囲気が違うことを比べて聴かせると、子どもたちは「そういうことなのか」と感じ取って作曲者の工夫を見付けていく。事実に気が付くことはできますが意味まではなかなか分からないので、何らかのキーワードとなるものを自分なりに考える。それは習慣化させています。

○わち・ひろき
上野原市立上野原西小学校教諭

子どもの助けを借りる

木下：江田先生は以前、TTをなさっていたと伺いましたが、その経験は生かされていますか？

江田：はい。新任の先生方からよく相談を受けます、授業がうまくいかなくて困っていると。実際にその現場を目の当たりにすることもあるのですが、そのとき明らかに分かるのは、教師が一人でもがいているということです。そんなときは「困ったときは子どもの助けを借りようよ」とアドヴァイスします。子どもたちの助けを借りられるというのは、ある意味で「いっしょに授業を進めている」ということですから。

木下：そうですね。

江田：授業では、子どもたちは感じ取っていても、それをどう言葉で表せばよいのか分からないという場面がたくさんあります。そういうときホワイトボードに○を４つ書いてみると、すぐに「まとまり」と結び付く。「線を引い

て説明しなさい」と言うと、急にハードルが高くなってしまうけれど、「工夫していると思ったところを○で囲んでごらん」と言えば○が付けられる。その後に、なぜ○で囲んだのだろうか？とみんなで考えていくと、客観的にいろいろな意見が出てきます。『待ちぼうけ』の場合、子どもたちはすぐ２分音符に○をします。それは「言葉のまとまり」で最後がすべて２分音符になっているんだというふうに、○で囲んだ意味が後で分かってくるのです。

音楽と向き合う

古田：先生の楽譜の読み込み方が、授業に反映されている気がしました。先生が『待ちぼうけ』という曲をどのように感じているのか、楽譜をどう読んでいるのか…指揮者としての視線を感じます。

江田：和歌山市交響楽団の指揮者としての経験は、もちろん授業に生きていると思います。指揮者は指揮棒を振っている時間よりも勉強の時間のほうが長く、楽譜を読んで、ほんとうにこんなことを考えているのかな？どう考えているのかな？なぜこっちの音にしたのだろう？なぜ２回目の和音をこんなふうに書いたのか？ということをいろいろと解釈していくわけです。作曲家は「繰り返すときに絶対同じことはしない」そうですね。

和智：というと…？

江田：同じことを「繰り返す」ことを、僕たちはすぐ「リピート」とか「反復」とか言いますが、ほんとうの「反復」なんてありえない。繰り返しているように見えても、２回目は必ず違うんだと。そうでないと意味がないのです。

和智：繰り返すときに、その技術的なことを、どう教えるかではなくて、どのように音楽と向き合うか、ということでしょうか？

江田：もちろん音程や長さも大切ですけれど、そこで表現していることは何なのか？歌詞を見て、つくった人がインスパイアされたところはどこなのか？そこに込めたものは何なのか？それがいちばん大切なところですよね。

木下：なるほど。

江田：授業で扱う曲の分析も自分なりにしますが、すべてをする必要はありません。「待ちぼうけ」と聞いたときに、その言葉からパッと思い浮かぶイメージってありますよね。それは何かと考える。例えばローマ字で「MACHIBOUKE」と書いてみると「あいうえお」が全部含まれている。「ある日せっせと」にも。だからこそ、「待ちぼうけ　待ちぼうけある日せっせと」の言葉の色彩感があるのだと僕は思います。そういうことは子どもにはあまり言いませんが、ちょっとませた子には「待ちぼうけってローマ字で書いてごらん、何か気が付く？」と投げかけます。そんなふうにして「なんだ、授業なんて…」と思っている子どもを引っ張り入れる工夫もしています。

授業者に訊く―2

中学校では、校内合唱コンクールを目前に控えた３年生の授業をご紹介します。江戸川区立二之江中学校では、３年生の課題曲を先生ご自身が作曲されました。協同学習によりお互いを高め合う活動に取り組むとともに、卒業へ向けた強い思いを歌にのせて表現していました。

授業者：相馬孝洋（江戸川区立二之江中学校）

本時の授業の位置付け

本時は合唱コンクールに向けた活動の８時間扱いのうちの第７時です。本校の研究の柱である「コの字型・４人組による学びあい学習」も取り入れながら、互いの歌唱法や工夫について、協同学習の形で取り組みました。

合唱コンクールは運動会と並んで本校を代表する行事の一つです。特に３年生にとっては卒業前の最後の行事です。今年度は、私自身が教師になって初めて出会い、３年間を共に過ごした生徒たちへ向けて、課題曲を作詞･作曲しました。音楽をより身近に感じ、生涯を通じて音楽に親しむ契機となるとよいと思っています。

内野雅晶 先生
江戸川区立二之江中学校
校長

授業の流れ

	○学習の内容　・学習活動	●指導上の留意点　☆評価
導入	・体操（肩首ほぐし） ・声出し「校歌（１番のみ）」	●リラックスさせ、落ち着いた環境づくりに努める。
展開	〔展開Ⅰ〕 合唱コンクール課題曲『いま ここ』 ○課題の確認 表現の工夫（ブレス、表情、強弱）について、互いに高め合い、「相手に伝わる」音楽にしよう。	
	・ブレスの確認（ペア学習） ・表情の確認（４人組学習） ・強弱の確認（全体で） ・生徒による指揮、ピアノ伴奏を入れて合唱	☆互いの評価を生徒同士で見合って行う。 ●励まし合い、競い合うように声かけをする。
	〔展開Ⅱ〕 合唱コンクール自由曲『親しらず子しらず』 ・後半のブレス、表情、強弱の確認（パート練習） Ａ：パートでピアノの周りに集まる。 Ｂ：それ以外の生徒は４人組でプリント学習。	●曲想の変化、テンポや強弱の微細な変化、それぞれの場面の質感や距離感など、イメージをもって音楽を捉える。
まとめ	○本時の学習の成果を伝え、合唱コンクールへの意欲につなげる。	●心のこもった説得力のある音楽表現には、ブレス、表情、強弱など技術的な工夫が不可欠であることを伝える。

最高の合唱を目指して、生徒と向き合う授業を

聞き手：小泉 孝（名古屋音楽大学）

授業の前に…

小泉：今日はどのような授業になるのだろうとすごく楽しみにしておりました。授業の前に、ピアノ伴奏と指揮の生徒に指導していらっしゃいましたが、各クラスで行っているのですか。

相馬：はい。ピアノ伴奏の生徒は、ほとんどが中学校に入学する前から専門的にピアノを習っているのですが、技術的に不足していたり、合唱とうまく合わせることができなかったりすることで、もう伴奏はしたくない、という生徒もこれまでには残念ながらおりました。これではいけないと思い、自分なりにどうしたらいいかと考えたときに、できる限り指導をしてあげようと思いましたので、昼休みや放課後などに教えています。

○そうま・たかひろ
江戸川区立二之江中学校教諭

小泉：指揮の生徒には呼吸の仕方や左手の使い方など、細かなところまで指導されていたのが印象的でした。

相馬：何も習わずただ拍子に合わせて指揮を振っているだけではおもしろくないのですが、「左手を少し入れてごらん、一緒にブレスをしてごらん、できる範囲でいいから強弱の合図を出してごらん」とアドヴァイスをすると、生徒は一生懸命練習してきます。合唱コンクールでは、よりよい指揮や伴奏をみんなに目指してほしい、自信をつけさせてあげたいという思いから、指揮者賞を設け、伴奏者賞も積極的に出すようにしました。指導するのは大変なのですが、生徒に「指揮者になってよかった」と後で言ってもらえると、教えていてやりがいを感じます。

小泉：今日の授業では、先生の伴奏に合わせて、ピアノ伴奏の生徒が後ろの電子ピアノで弾いていましたが、あれは何か意図があったのでしょうか？

相馬：あの生徒はピアノ伴奏がまだうまく弾けないので、途中で止まってしまうことがあります。中学生はできていないことをみんなに知られてしまうと傷つきやすい年頃なので、それに配慮しました。それから、私といっしょに弾くことによって、右手だけでも呼吸やテンポ感などを合わせられるようになるので、少しでも生徒にとってプラスになると思います。特に、本番で止まってしまうと「弾かなければよかった」と思う可能性もあるので、そうならないよう責任を感じながら指導しています。

小泉：今日のクラスは、ふだんどのような雰囲気ですか？

相馬：元気はよいのですが、中にはそこまで音楽に興味をもてなかったり、得意ではないので前向きになれなかったりする生徒もいます。そういった生徒たちを前向きにしてあげるというのが自分の役目だと思っています。少しでも多くの音楽と触れ合ってもらうことで、声を出すことに抵抗のある生徒がいなくなったらいいなと思います。

生徒一人一人の「最高の声」を集めて

小泉：私が感心したのは男子の発声です。特に高い音の部分で「吠え声」のようになり、男子の声のほうが勝ってしまうということがよくあるのですが、このクラスは混声三部合唱に溶け込みやすい声になっていました。

相馬：高い声をうまく出せずに裏返ってしまったり、音程が下がってしまったりする原因は、ほとんどが力みだと思います。この学校に赴任したときから、いかに力を抜いた声が美しく、歌っていて気持ちがよいか、という指導を何度もしてきました。

小泉：その積み重ねが、あの声を少しずつつくり上げてきたのですね。

相馬：一人一人に自信をもたせ、最高の歌声が集まった合唱にしたいと常に思っていますので、日頃から「自分の最高の声を出そうね」と教えています。

小泉：男子と女子それぞれに、核になりそうな歌声の生徒が何人かいました。でも、そのような生徒の声が突出するのではなく、みんなの声が合唱を支えているのを感じながら聴かせていただきました。

3つのポイント、合唱と言葉

小泉：黒板には、「相手に伝える表現」のポイントとして、「１．ブレスを深く、そろえる」「２．表情豊かに、曲の雰囲気・変化を感じて」「３．聴いている人が強弱を分かるように」と書かれていましたが、その３つに加えて言葉の扱いについても重点的に指導していらっしゃいました。言葉の表現について先生が大切になさっていることを教えてください。

相馬：どんな曲を歌うときでも、「子音に気を付けなくてはいけない」と必ず言います。そのために、歌詞を文節で区切り、頭の文字に○を付けて、その音をローマ字で記入させています。例えば「いま ここ」という歌詞では、「い」に○をして「I」、「こ」に○をして「Ko」と書き入れさせています。すべての楽譜についてこうしていますので、生徒は言われなくても書き入れるようになりました。合唱において言葉は切っても切り離せない、絶対的な音楽の要素だと思っていますので、最初に徹底して学習することで、相手に伝えるための表現を考える活動につなげていきたいと考えています。

小泉：言葉は、表現を工夫するときの根幹を成すものだと思います。そのうえでこの板書の３つに焦点を絞ろうと思われた意図は何でしょうか？

相馬：いちばん伝えたかったのは「相手に伝えるために一体感を出すこと」だったのですが、出だしがそろっていなかったり、強弱が曖昧になってしまったりしていたので、これらにポイントを絞って指導していく必要があると思い３点を挙げました。

小泉：「一体感」という言葉が出てきましたが、これは「ブレス」を大事にするというところにつながりますね。

相馬：最初のブレスで演奏の印象が変わってしまうので、どのクラスでも注意させています。合唱コンクールでは生徒も審査員になるのですが、審査員への指導でも、出だしの部分でどのように息を吸っているか、さらには男声と女声のバランスや音程は整っているか、言葉は聞こえるか、どのくらいみんなの気持ちが一つになっているように聞こえるかといった観点をもちながら「いちばん最初の声をいちばん大事に聴くように」と教えています。

小泉：最初のブレスの仕方と同時に、

○こいずみ・たかし
名古屋音楽大学特任教授

途中の休符のところも指導されていました。

相馬：休符を意識すると、フレーズ感や大事な言葉の表現をもう一度確認できます。以前に授業でも指導したのですが、「また甘くなってきたよ」と指摘したかったのです。

小泉：２つ目の「表情豊かに」というのは、音楽の表情に加え、生徒の顔の表情も含めてお考えですか？

相馬：そうですね、「いきいきとした顔で歌おう」という意味も含まれています。真剣に歌っていると能面のような表情になってしまうことがあるので、そのようなときは２人組や４人組でお互いに向き合いながら練習をします。そうすることでみんながいきいきと歌い、お互いを高め合う効果が生まれます。これは本校の特徴的な協同学習の形の一つです。

先生から生徒へ、曲のプレゼント

小泉：『いま ここ』は、合唱コンクールの３年生課題曲として相馬先生がつくられたとのことですが、卒業が頭に浮かぶような内容で、思いがよく伝わってきます。

相馬：毎年、合唱コンクールの課題曲を卒業式で歌うというのが本校の慣例になっているので、そのことを念頭に置いて作曲を始めました。卒業式で歌うということ、またクラスでの最後の行事である合唱コンクールで歌うということで、「卒業」が大きなテーマになっています。

小泉：作詞も先生がなさったのですね？

相馬：学年の先生方に「いま ここ」「刹那（せつな）」のように、ひと言ずつ言葉を書いていただいて、それらを私が詩としてまとめました。

小泉：先生方の言葉を集めて？すばらしいですね！

相馬：先生方にとっても、自分の考えた言葉が歌詞の中に入っているのはうれしいことですし、生徒たちにとっても、先生たちの思いが詰まっていると喜ぶだろうと思いましたので、このような形にしました。

小泉：たいへんよく整っていて、曲自体のまとまりをすごく感じました。作曲するにあたり、こだわった部分はありますか？

相馬：いちばん考えたのは、生徒が前向きに取り組めること、そして難しすぎないことです。生徒の声が出にくい音域を避け、ピアノも難しくないよう配慮しました。それから、合唱コンクールには時間的な制約もあるので、長すぎないことです（笑）。

小泉：生徒たちも喜んで歌っていましたよね。

相馬：最初に学年集会で弾き語りをして聴かせたのですが、手応えを感じました。

小泉：生徒たちは先生が作曲されたということをもちろん知っていますし、その先生が曲や歌詞のことを直接お話しされているわけですから、生徒たちも、先生の指導を受けられることを喜んでるように感じました。

相馬：これまでに吹奏楽曲はたくさん書きましたが、最初の頃は生徒の実態に合っていない曲もありました。今回合唱曲を書くにあたり、自分が教師として教えるようになって、生徒たちにふさわしいものをどうやって書いていくかというのが大きな課題だと思い、そのために自分なりに勉強をしました。自分のためにいい曲を書く勉強ではなく、音楽を専門としない一般の生徒たちのために作曲をする勉強です。プロの作曲家は、その曲の目的や演奏する人の技術にふさわしいものを作曲していると思うのですが、同じ視点で、卒業式で歌われている曲はどういうものなのかということを、たくさん研究しました。

小泉：なるほど。混声三部合唱の曲をすでにたくさんお書きになってきたうえでこの作品が生まれたのかと思っていました。目の前の生徒たちを出発点にしながら、このような音楽を編み出されたということに、とても感動しました。曲名の『いま ここ』は学校の教育目標でもありますよね。

相馬：教育目標が他の学校と違って印象的です。「いま ここ」と聞くだけで、いろいろなことを連想することができます。

小泉：このように教育目標に関わるような言葉が音楽の中に出てきますと、その言葉が生まれた背景や重み、広がりなども指導することができます。３年生はこの曲を歌って卒業した後も、「いま ここ」という言葉を思い出すのではないかと思います。そうすると、自然にこの中学校のことを思い出したり、友達を大事にしたり、さらには過去の思い出とともに自分自身を大事にしたりすることにもつながりますので、そういう出発点になるような気がしてうれしくなりました。

最高のものを引き出したい

小泉：音楽の本質的なところを捉えながら、それを生徒たちに分かりやすくエネルギッシュに指導されていました。

相馬：私は吹奏楽部の指導をしていますが、「最高のものを出そうと思うのなら、その準備が大事だ」という話をよくします。本番で最高のものを出すのは難しいことであり、そのためには、人知れぬ苦労や労力を惜しまないのは当然です。音楽の授業でも、生徒たちそれぞれがすばらしいのものをもっていると信じていますので、それらを最大限引き出すために、まず私自身が常に全力で行うという姿勢を見せていきたいと思っています。加えて、一生懸命がんばったことは、それ自体が財産になるということも生徒には伝えたいです。そのためには、それなりの時間をかけなくてはなりませんし、エネルギーも必要ですが、今はそれができる、私にとって恵まれた環境にあるので、できる限り全力で続けていきたいと思います。先日、クラス紹介のときにみんなが私のことを「何事も全力」と書いてくれたので、うれしかったです。

小泉：今日の授業でも、先生が伴奏を弾きながら全身で音楽表現をしているように見えました。そして、それが生徒たちに伝わり、生徒たちの表現がより豊かになっているように感じました。

相馬：そこは特に意識をしている部分です。生徒から最高のものを引き出そうと、喉から手が出るほど必死に、もっとこうやって歌ってほしいと思いながら指導しているので、それが一つ一つの動作や表情にも出ているのだと思います。今日は疲れていて調子が悪いなと思うときがあっても、生徒たちの前ではすぐにスイッチがオンになってがんばってしまいます。まだまだ課題はありますが、ほんとうに教えることが好きなのだと実感しています。

小泉：先生も幸せな時間を過ごしていらっしゃると思いますが、それ以上に、生徒たちは相馬先生と出会えて幸せだと思います。

相馬：ありがとうございます。

特集

他教科の指導者が語る、音楽科の意義

ヴァンではこれまで、数多くの座談会を掲載してきました。
それらは音楽科、あるいは音楽を指導される先生方による「よりよい実践を目指すため」の内容であることが特徴です。
今回、初めての試みとして他の教科を指導される先生方が音楽科を語ります。
音楽科が果たしている役割、音楽科に期待すること…などなど、東京都の都立高等学校で指導される4人の先生方が大いに話し合ってくださいました。
司会と総括は、東京音楽大学の工藤豊太先生。熱のこもった内容を皆様にお届けします。

イラストレーション：大塚砂織

言葉の学習はおそらく音楽と近いところがあります

工藤 晋（英語）

美術と音楽は切っても切れない関係です

佐治香菜子（美術）

国語科では音楽に助けてほしいことがあります

鈴木信子（国語）

物理でも数学でも、音楽ネタはいっぱいです

丸山 朗（数学）

●自分にとっての音楽とは？

司会：先生方ご自身と音楽との接点についてお聞かせください。

丸山：現在は数学を担当していますが、以前は物理を担当しておりました。音楽は、中高で吹奏楽、大学では学生オーケストラに所属。教員になってからは文化祭で生徒のビッグバンドに参加したり、吹奏楽の副顧問をしたり、市民オーケストラでトロンボーンを吹いたり…。ほんの少しは音楽にかかわってきたかなというバックグラウンドです。

工藤：実は自分にとって音楽は英語よりも近くにある存在です。もちろん素人ですけれど。僕はもともと大学では美学・芸術学を勉強していました。ジャズピアノやフルートを少し演奏します。音楽がとても好きで、昨年顧問をしていた吹奏楽部の定期演奏会でも２曲ほどステージで吹きました。とても大変で二度とやるまいと思いましたが(笑)、とても楽しかったです。

佐治：大学での専攻は日本画でした。幼稚園の頃からピアノを習い、教員になって１年目ぐらいまで同じ先生に習っていました。練習は苦手でしたが、高校生の頃に、「自分の表現」ということを意識した経験があります。それからは楽しくなりました。現在は、ときどきストレスがたまるとピアノを弾きたくなって、夜にこっそり音楽室で、もちろん許可は得て(笑)、ストレス解消しています。

鈴木：物心ついたときから音楽が好きだったと記憶しています。今から20数年前に一絃琴という楽器と出会ったことが、私にとって大きな転機でした。歌の言葉に感銘を受けて続けていくうちに、いろいろな邦楽器と共演する機会が増え、ついに箏と三味線も習い始め、今では一絃琴を含めた３つの楽器を演奏しております。国語科の教員ではありますが、２

校前の定時制の学校では、総合的な学習の時間で和楽器を３種類教えていました。今は全日制の学校に勤務し、看護医療系や茶道や演劇など、総合学科でありとあらゆるものを担当しているので、音楽からは少し遠ざかっています。

●教科同士の関係性

司会：どの教科であっても興味・関心・意欲がベースにあるという基本は変わらないのではないかと思います。音楽もまさにそこからスタートしなければ成立しない授業ですが、英語はいかがでしょう？

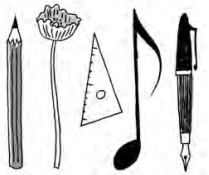
工藤：とにかく英語を好きになってほしいという気持ちはあります。言葉の学習はおそらく音楽と近いところがあって、話し言葉は音声の世界、書き言葉はビジュアルの世界といえます。その２つをどうミックスしていくかということが語学学習なのです。生徒には音声の言語というのは、音楽と同じものだよとよく話します。音は流れていくわけですから、その流れとして塊をどう聞き取るのかが大事なのです。ICTなどの発達によって今の子どもたちは非常に耳がよいので、発音がすごくいい。これは近代機器の勝利だと思います。また、書き言葉でも文法にはリズムがあるんだよ、SVもリズムの一つだよと、音楽の比喩を使った話をよくします。

司会：鈴木先生は、さきほど「歌の言葉に感銘を受けて」とおっしゃっていましたね。

鈴木：宮尾登美子さんの『一絃の琴』という作品で扱っている一絃琴を偶然知りました。そこで歌われている歌詞は単に和歌や漢詩を翻訳したものではなく、その精神を歌に移したという歌詞です。あるとき『赤壁賦（せきへきのふ）』という中国文学を日本語にして歌っているのを聴いて、これは高雅な歌詞である、授業で使えると思い、扱い始めました。言葉は音楽と非常に近く、ある種一体化している部分もありますので、英語も国語も音楽に近い教科だと思っています。国語でも「節にのせて覚える」というのは便利な方法です。授業で童謡の『うさぎとかめ』や、滝廉太郎の『花』のメロディーにのせて覚えることもあります。

司会：工藤豊太

工藤：以前鈴木先生と芸術高校で同僚だったときのことを補足します。鈴木先生は漢文を教える際に、まずご自身が中国語で音読されます。生徒たちは漢文の構造に四苦八苦するのですが、鈴木先生の音読を聞けば、それは一つの音の流れであるということが分かるわけです。夏休みに補習をすると、漢文は受けなくていいのに音楽科の生徒がほとんど来るんですよ。それがすごかった。漢文を２つの文化の架け橋と考えるとするならば、中国語の音読が大きな力になっているなあと思いました。



司会：丸山先生、音楽と数学は結構かけ離れているような印象をもちますが、実際はどうですか？

丸山：物理でも数学でも、音楽ネタはいっぱい盛り込みます。例えば、物理では「弦の振動」です。物理の教科書にはただ弦が書いてあるだけですが、授業ではギターを使って、真ん中を押さえればオクターヴ上がるねといった話をし、「気柱の振動」が出てくるときは必ず金管楽器を持って行きます。隣の教室から怒られますけれど（笑）。物理で加速度の “a” は “acceleration” のことなので、音楽の得意な生徒がいれば “accelerando” の “a” だねという話をします。また数学では三角関数の単元で「音のうなり」の話をします。音程がずれていれば１秒間に１回うなりが聞こえるという数式上の話と、実際に周波数の違う音叉を２つ鳴らせばうなりが聞こえるね、といった話です。物理や数学も音楽と決して遠くはない、むしろ近いと私は思っています。

佐治：美術と音楽は切っても切れない関係ですが、音楽は一瞬一瞬で音が消えていってしまうので、爆発するように表現するタイプの生徒が音楽科には多いように思います。もちろん美術科の中にもそういう生徒がいますが、美術科の生徒は自分の中で消化してそれを表出していくといった控えめな子も多いのかな、と思います。芸術高校から普通高校に異動してきて、美術も音楽も得意という生徒がたくさんいるのにびっくりしました。絵のとても上手な生徒が合唱祭でピアノを弾いているなど、表現の得意な生徒はいろいろな形で表出できるのだな、と感じるところです。音楽、美術、書道をそれぞれ学習するとよいかもしれません。

司会：先生方のお話をうかがって、教科が異なっても重なり合っている面が大きいということを感じました。

●音楽科に期待するもの

司会：芸術科以外の先生方は、音楽科をどのように見ていらっしゃいますか？期待などはありますか？

丸山：潜在的に音楽が好きだという生徒はたくさんいます。そういった部分を引き出そうとして、和太鼓を準備したり、箏を準備したりと、先生方は音楽の授業でいろいろな工夫をしておられます。前任校では年度末、自由にグループをつくって歌やボディーパーカッションなどの発表をしていましたが、生徒たちは昼休みも一生懸命練習していました。また、教科書自体がよく工夫されていると思います。たまに自習監督に行って生徒の教科書をパラパラと見ると、我々の頃の教科書に比べて新しい曲がいっぱい入っており、潜在的なものを引き出すようにつくられていると感じます。

鈴木：国語科では「音楽に助けてほしい」ことがあります。実は国語科の内容は、かなり評論読解の方面に重きを置くようになっています。自分が高校生だった頃や教員になりたての頃は、詩や短歌や俳句を扱っていました。それが今や、時間的な制約をはじめ「情報」などの新しい教科が入ったことで単位数は削られてしまっています。最低限国語は現代文だけ、古典は選択という状況です。現代文の中でも詩や俳句、短歌よりも評論重視――リテラシーという言葉が言われるようになった頃から、そういった傾向が表れているように思います。テストの点数だけに結び付けばよい、というのは教育ではないと思います。リテラシーも読解力が養われれば点数に結び付くかもしれませんが、点数にはならない学び、そういった国語の勉強も大切だと思うのです。音楽は歌うことを通して必ず言葉がかかわってきます。

ぜひ詩の教育を助けてください。俳句でも短歌でも音楽で扱う言葉の部分を取り上げてほしい、コラボレーションしたいという気持ちがあります。

工藤：もっと言えば、音楽の教科書に詩が載ればいいと思います。詩の朗読も音楽だよと教えればいいわけです。言葉のもっている音楽的な力、詩が駆逐されるというのは、ほんとうに危機的だと思います。

司会：同じ芸術科の美術の授業では、どのようなことを心がけていらっしゃいますか？

佐治：自分のことを見つめ直し、それを外に出すことを通して考える、頭を使うことをしていきたいと思っています。美術でも、ちょうど音楽における楽譜の枠組みのように、デッサンであれば「対象のとおりに描けていないといけない」部分もありますが、どうすれば生徒が自由な表現でなおかつそれを伸ばしていけるのかな、と考えます。デッサンではそのまま描くのですが、油絵だとある程度の枠を与えて、あとは自由にさせる、という方法です。自由すぎるとだめなんですよね。

一同：なるほど。

●素直で礼儀正しい今の高校生

司会：ところで、現在の高校生はどのような生徒なのでしょうか？

工藤：それぞれの学校によってイメージは違うと思いますが、昔は受験校と呼ばれる学校には教員に食って掛かる生意気な生徒がいたものです。15年ぶりに同じような受験校に異動して感じるのは、生徒が総じて素直で非常に礼儀正しいことです。朝、学校に着くと、朝練をしている野球部の生徒が素振りをやめて「おはようございます」と挨拶するのには驚きました。

鈴木：私も同感です。最近の高校生はとても素直で授業でも先生の言うことをよく聞きますね。

丸山：現任校には勉強の得意でない生徒もいて、しかも福祉科・体育科・普通科の３つの学科があり、それぞれ特徴も異なります。体育科には多少乱暴なことを言うような生徒もいますが、そのような体育科でも一昔前よりいい意味でも悪い意味でもおと

○くどう・しん
東京都立国分寺高等学校

なしくなってきている、と聞いています。

佐治：私はいろいろなタイプの学校に勤めてきたので、なんとも言いづらいのですが、生徒がとても従順なのは確かです。美術の授業でも「ここはこの色がいいんじゃない？」と言うと、ほんとうにその色で塗ってしまうので、逆に怖さを感じています。もちろんそれで作品がよくなるのであればかまわないのかなとも思いますが、最近は気を付けて「あなたは何色がいいと思う？」と聞き返すようにしています。相手によく思われたいという気持ちが強いのでしょうか。ただし、不満をもっていないわけではないんですね。不安を抱いて、くすぶっているのだと思います。そのあたりをSNSなどで解消しているのかもしれません。昔であれば携帯電話もメール機能ぐらいしかなかったので、そういったこととのかかわりもあるのかなと感じます。

●アクティブ・ラーニングへの対応

司会：次の学習指導要領改訂のキーワードは「アクティブ・ラーニング」ですね。音楽はその最たる教科だと思います。そのあたりはいかがですか？

鈴木：音楽はアクティブ・ラーニング以外の何ですか？と言いたいです。困難な学校ほど生徒を引き付けることが大変ですが、音楽はそれがないと成り立たない科目ですよね。本人が「この先生いやだな」と思ったら、国語であれば寝たふりをしてそこにいることもできますが、音楽は自分がその気にならないと声に出ないですから、アクティブ・ラーニングで通すしかありません。さらに生徒を動かしたり引き付けたりするために、サプライズがあるような授業をすると、もっとアクティブ・ラーニングができるかもしれません。今までにしてきたことが今後にもつながって、有効な手段となっていくのが音楽だと思います。

丸山：数学や物理だと一方通行になりがちなので、それではいけないと反省しています。私が定時制にいたときは専任の芸術科の先生がいなかったので、講師の先生を中心に、全員で音楽の授業をしていました。ピアノを囲んで元気よく歌って非常に楽しく進めていたのを思い出します。言葉の力、歌の力というのは、まさにアクティブ・ラーニングになると思います。

司会：一人の生徒にはさまざまな可能性がいっぱい秘められています。そこで、いろいろな体験をするというのが重要だと思っています。

佐治：一つの素材でずっと油絵、のようなことはしないようにしています。美術の授業では、音楽を希望していたのに入れなかった、あるいは消去法で美術を選んだという生徒も何人かいます。がんばったのに成績が振るわず、美術を嫌いになってしまうことも考えられるので、まずはいろいろなことを経験させ、絵は苦手だけど作ることは上手など、少しでも得意なものを引き出すようにしていくことが大切です。音楽でも、歌は苦手だが器楽は得意な生徒がいるように、いろいろなことを学習させ、可能性を見付けたいと思います。

●他教科からみた音楽科の存在意義

司会：学校における音楽科の存在意義について、うかがいたいと思います。

工藤：歌をたくさん歌ってほしいです。歌を歌うと

○すずき・のぶこ
東京都立若葉総合高等学校

○さじ・かなこ
東京都立深川高等学校

いうことは、人間にとってクリエイティブなことではないかと思います。音楽はいろいろなところに潜んでいます。楽譜を読んで歌う、ベルカントで発声する、西洋音楽を理解するという文化的なリテラシーも大切ですが、おそらくもっとプリミティヴな力を音楽はもっています。叩いたり歌ったりしても音楽になりますし、詩を朗読することでも音楽になるでしょう。そういった根源的な音楽に生徒が気付くようなサプライズがあればすごく魅力的だと思います。

丸山：１年生が入ってきたら、みんなが校歌を歌えるようにしてほしいです。校歌はそれぞれの学校の宝物であると思います。また、工藤先生がおっしゃったサプライズ的なこととして、以前、若葉総合高校では音楽の授業に打楽器奏者をお呼びして、ジャンベやカホンなどの体験を含めて２時間のミニコンサートを毎年行っていました。また、篳篥（ひちりき）でポップスを吹いて聴かせる先生もいらっしゃいました。これもサプライズの一つだと思います。

鈴木：今はどの教科でも目新しいことが求められているように思いますが、私は逆にオーソドックスでよいのではないかと思っています。地味ですが、歌を歌う、鑑賞する。私はこの「鑑賞」の部分が大きいと思っています。聴いてワークシートを書くだけの楽な授業に見えるかもしれませんが、私は高校のときに『シェエラザード』などの標題音楽を聴いて「標題音楽っておもしろいな」といろいろ聴くようになりました。今、高校３年生で森 鷗外の『舞姫』を扱っていますが、文章の中に「ウンテル・デン・リンデン」という大通りの名前が出てきます。「菩提樹の下」と訳すと物静かな大通りのように思われるが、ほんとうは違うという記述があります。そこで「菩提樹って知ってる？」と聞くと、生徒は何のことか分からずポカンとしています。名曲を聴くことは、豊かな感性を育てるだけでなく、文学などほかのジャンルと結び付くこともあります。

佐治：私は高校生のとき、ピアノの先生に「高校生だからといって素人とは思っていない。私はあなたを一人の芸術家と思って接しているから」と言われたのが心にものすごく響き、大きかったのを覚えています。やんちゃで言うことを聞かず適当にどなり声で歌う生徒もいると思いますが、大人として、一人の表現者として扱うことで変わる部分もあると思います。音楽科の先生方は苦労されていることも多いとは思いますが、ともにがんばりましょう。

工藤：学校で学ぶ音楽の意義についてちょっと思うところがあるのですが「一致団結して合唱できたことが将来の社会生活で役に立つ」という言い方がありますね。音楽はその場で楽しんだことが人生の豊かな経験になります。そこが最終的な目的のはずなのに、組織の中で働くときに役に立つという部分が強調されすぎると、なにか違和感を覚えます。

佐治：どちらも分かります。受験校で勉強ばかりになっている生徒を楽しませたいとき、また興味がない生徒を引き付けたいときの理由付けとして、社会生活に役に立つと言わざるを得ないとき。美術でも同様で、デザインを勉強しておくと見やすくて分かりやすい資料を作ることができるよという意味付けをすることがあります。

工藤：楽しかったね、一生の思い出になったね、唯一無二の経験だったね、で終われればいいのでは？もちろんそれはco-operation（共同作業）がなければ得られないわけですから、協調できたということは人間性が成長したねというのはそのとおりですが、最後は音楽の力を体験したというのが大

○まるやま・あきら
東京都立野津田高等学校

事なところだと思います。
佐治：バランスが大切ですね。

●音楽科教員への熱いメッセージ

司会：音楽科の先生方に向けてメッセージをお願いします。
工藤：音楽は最後の砦です。私は音楽が好きですし、自由な表現が許されている最後の教科だと思います。音楽科がクリエイティブである、元気であるというのは、教育文化の中で一つの大きなメルクマール（指標・目印）ではないでしょうか。そういう意味で、音楽科の先生がいなくなったり、音楽がなくなったりすれば寂しいことになると痛感しています。
佐治：やっぱり音楽の先生は専任であることが必要だと思います。
司会：このことは音楽科だけの問題ではなく、学校全体の問題として捉え、音楽専科について考えていただきたいですね。
工藤：伝える力をつくることができるのは音楽科だと思います。「歌は人に届く」といっても、伝える力がないと届きません。英語でもこれからはスピーチやコミュニケーションが重視される時代になるので、「音楽で歌を歌っているときのように伝えよう」という展開にできるといいですね。
佐治：美術や書道もできますが、音楽のほうが人を泣かせる力をもっているじゃないですか。絵を見て泣くのは一生に１回か２回ぐらいですが、音楽はすごい人数を一気に泣かせる力やライヴ感をもっています。それは誇るべきところだと思います。美術にはできないところです。
丸山：音楽の授業数や専任の先生が削減されているのは、学校全体の定数が決まっている中で、受験科目を充実させるという方針だと思います。ただ、受験に直接役立つガソリンのような役割の教科を増やしても、いいオイルを使わなければ、エンジンは回らずいい車はできないと思います。そういうところを重視していかないといけないのではないでしょうか。
鈴木：「個」を大事にとよく言われますが、その個性をいちばん養うのが音楽だと思います。表現の仕方は言葉であったり、絵の色や形であったり、音だったりするわけですが、いちばん根本にあるのは音だと思うのです。音楽に限らず、声を出して話すというのが大切です。やはり面と向かった声の力というのがあり、それが生徒を引き付けて授業が成り立つ。いくら声が大事だからといっても、国語では40人に毎回一人ずつ声を出させるわけにはいきません。その部分こそ音楽に期待しています。

座談会を終えて

～音楽科は教育文化の中のメルクマール！

工藤豊太（東京音楽大学教授）

7月29日付の日本経済新聞（朝刊）の社説が目に留まりました。見出しが“大学を衰弱させる「文系廃止」通知の非”というものです。この通知は国立大の第３期中期目標・中期計画の期間（６年間）が来年度から始まるのに合わせて文部科学省から出されたものです。社説は、この通知には「すぐに役に立たない分野は廃止を」と解釈できる不用意な内容が含まれており、大学界を混乱させているので、これを撤回すべきである、という内容でした。実は、この話とリンクするかは定かではありませんが、今回の座談会でも高等学校から音楽科の専任が――特に、進学校から――消える傾向にあるという話がありました。冒頭の社説を読んだときに、この座談会の話が鮮明に思い出され、地下の水脈でなにかしら繋がっているのではないかと感じるものがありました。

話は変わりますが、国内では初のMRIを開発した脳科学者で、現在日立製作所役員待遇フェローである小泉英明氏が、自身の編著による『恋う・癒す・究める　脳科学と芸術』（工作舎）という本のまえがきで、芸術の大切さを次のように述べています。

> “技術革新や経済政策とも呼応して、教育界では、いわゆる「知育」への傾きが大きくなっています。数学や国語などの主要５教科に重心が移り、芸術科目は少しずつ隅へ追いやられています。けれども「脳科学」から見ると、それは望ましい方向とはいえません。なぜなら、いくら知識や技能を頭や体に詰め込んでも、それを世の中のために活用しようとする志（こころざし）やパッションがなければ、なにひとつ始まらないからです。まさに、宝の持ち腐れとなります。〈中略〉脳科学から見ると、芸術とはまさに「感性・知性の協創（協奏）」であり、「すばらしい感動の共有」を組織化する営みです。”

今回の座談会の内容は、まさしく小泉氏の述べていることが現場の他教科の先生方の言葉によって実証されるものでありました。特に、「音楽科がクリエイティブである、元気であるというのは、教育文化の中で一つの大きなメルクマール（指標・目印）ではないでしょうか。」という発言には、音楽科が果たさなくてはならない重要な内容が含まれています。また、日々の実践をしっかり積み上げていくことの重要性についても述べられていると感じました。

Information

2015年秋以降に予定されている主な研究大会やイベントをご紹介します。

研　究　大　会

10月　October

●16日(金)

新潟県　上越市立大町小学校、上越市立国府小学校、
上越市立南川小学校、上越教育大学附属小学校、
上越市立三和中学校
上越文化会館（上越市立城西中学校、上越市立城北中学校）

第57回　関東音楽教育研究会　新潟大会

大会主題　「味わおう音楽を　伝え合おう思いを」

問い合わせ先　上越市立下黒川小学校　横田幸恵
〒949-3233　新潟県上越市柿崎区柳ケ崎707番地
TEL 025-536-2467 / FAX 025-536-6506
simokuro@jorne.or.jp

●29日(木)・30日(金)

静岡県　静岡市民文化会館、静岡市立葵小学校、
静岡市立城内中学校、
静岡大学教育学部附属静岡小・中学校、
常葉学園中・高等学校、
静岡市清水文化会館マリナート

**平成27年度　全日本音楽教育研究会全国大会
静岡大会(総合大会)
第14回　東海北陸音楽教育研究大会　静岡大会
平成27年度　静岡県教育研究会音楽教育研究部研究大会**

大会主題　「ひろがれ音楽　つながる心」

問い合わせ先　大会実行委員長
静岡市立長田南小学校　校長　長野恭江
TEL 054-259-6133 / FAX 054-257-8763
http://music.shizuoka.ednet.jp/

11月　November

●6日(金)

北海道　まなみーる岩見沢市民会館・文化センター、
北海道岩見沢緑陵高等学校

第57回　北海道音楽教育研究大会　空知岩見沢大会

大会主題　「わかる楽しさ　できるよろこび　わかちあう感動
～思いを響かせあう音楽の学びをめざして～」

問い合わせ先　大会運営委員会事務局長
岩見沢市立栗沢中学校　教頭　菅原理恵
〒068-0132　北海道岩見沢市栗沢町南幸穂27番地
TEL 0126-45-2784 / FAX 0126-45-3784

●6日(金)

青森県　青森市立泉川小学校、リンクステーションホール青森
青森県立青森東高等学校

**第63回　東北音楽教育研究大会　青森大会
第38回　青森県音楽教育研究大会　青森大会**

大会主題　「感じよう！ 伝えよう！ 分かち合おう！
音楽の喜び」

問い合わせ先　大会事務局
青森市立沖館中学校　教頭　会津完治
〒038-0002　青森県青森市沖館5-19-1
TEL 017-781-08555 / FAX 017-782-3909
okidatechu@aomoricity.ed.jp

●20日(金)

広島県　上野学園ホール(旧広島郵便貯金ホール)、
広島市立中筋幼稚園、広島市立大芝小学校、
広島市立中筋小学校、広島市安佐南区民文化センター、
広島県立安古市高等学校

第46回　中国・四国音楽教育研究大会　広島大会

大会主題　「深める楽しさ　つながる喜び」

問い合わせ先　大会事務局
広島市立中筋小学校　教頭　岩本ゆか
〒731-0122　広島県広島市安佐南区中筋2-15-5
TEL 082-879-1350 / FAX 082-870-6360

●26日(木)・27日(金)

宮崎県　宮崎市立赤江小学校、宮崎市立宮崎西小学校、
宮崎大学教育文化学部附属小・中学校、
宮崎県立宮崎西高等学校、
宮崎県立みやざき中央支援学校、
メディキット県民文化センター

**第56回　九州音楽教育研究大会　宮崎大会
第40回　宮崎県音楽教育研究大会　宮崎地区大会**

大会主題　「音・人　広がる音楽の力
～広げよう　深めよう　そしてつながろう～」

問い合わせ先　宮崎市立広瀬中学校　楠田一枝
〒880-0211　宮崎県宮崎市佐土原町下田島20305番地12
TEL 0985-73-1818 / FAX 0985-73-1971
http://www.mcnet.ed.jp/shochuonken/index.html

●27日(金)

京都府　京都市立みつば幼稚園、京都市立鳳徳小学校、
京都市立第三錦林小学校、
京都市立東山泉小中学校、
精華町立精華中学校、京都府立北稜高等学校、
京都コンサートホール

第57回　近畿音楽教育研究大会　京都大会

大会主題　「京(みやこ)の響き　つながるハーモニー」

問い合わせ先　第57回近畿音楽教育研究大会京都大会事務局
京都市立明徳小学校　西川聖子
〒606-0021　京都府京都市左京区岩倉忠在地町221
TEL 075-701-0111 / FAX 075-701-0112

― 新作合唱曲による公開講座 ―

Spring Seminar 2016

コンクール自由曲向けの新曲発表会「Spring Seminar 2016」を開催いたします。
同声・女声・混声の各2曲(全6曲)を合唱団、司会者、作曲家と学びます。
セミナー終了後「小学校の部」「中学校の部」「高等学校の部」に分かれて、Nコン課題曲のワンポイントレクチャーも行います。

- 日　時：2016年3月28日(月)
12:45～17:10
- 会　場：横浜みなとみらいホール 小ホール
- 参加費：4,000円(高校生以下2,000円)
テキスト代含む
- 司　会：藤原規生
- 出演者：アベタカヒロ、横山潤子、飯沼信義、
三宅悠太、加藤昌則、森田花央里
- 合唱団：八千代少年少女合唱団(指揮：長岡利香子)
栗友会(指揮：栗山文昭)
harmonia ensemble(指揮：福永一博)

● お問い合わせ：
教育芸術社　スプリングセミナー実行委員会
TEL 03-3957-1168 / FAX 03-3957-1740
http://www.kyogei.co.jp/